

三朝温泉病院 リハビリ通信

発行日
令和2年9月1日
Vol 10
発行責任者：山根隆治

学会特別号

第6回リハビリテーション科学術発表会開催

令和2年8月19日、第6回となる三朝温泉病院リハビリテーション科学術大会が開催されました。今年の演題数は10題で、日々の臨床の成果を検証する事例報告をはじめ研究発表、活動報告など多彩な内容でした。約2時間にわたって行われた発表では各演題ごとに活発な質疑もあり、真夏の暑さに負けない熱い一日となりました。

①母親としての役割を再獲得できたことで自己効力感が向上し、趣味活動に取り組むようになった事例
三浦 純

②作業療法士の接し方で生じた作業参加の変化の分析
〜意図的關係モデルの紹介〜
松本周三

③作業療法士という存在が排泄に対して不安を感じている事例に与えた影響
西東佳奈

④自動車運転再開を判断する高次脳機能検査の比較と再開後の事故件数の調査
増崎堅斗

⑤他職種連携の工夫
〜共に歩み寄り連携し回復を促す〜
別所大樹

中村貴紀

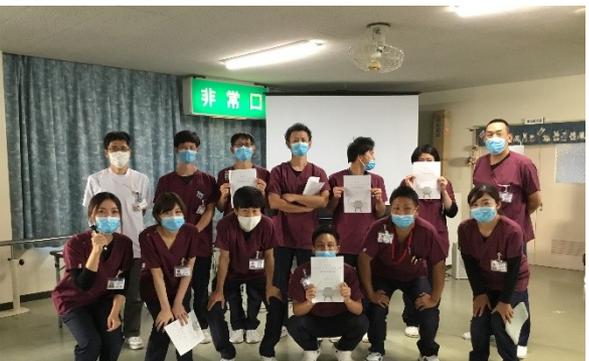
⑥三朝町いきいきサロンでの講演内容紹介
〜健康なカラダづくりに必要なこと〜
森 将志

⑦内側型変形性膝関節症に対する後足部に着目したインソール療法の効果
別所大樹

⑧生活行為向上マネジメントの紹介と活用方法について
中村貴紀

⑨長期にわたり寝たきり状態だったが、多職種連携の結果自宅への外出が実現した1症例
井尾政美

⑩第1子出産直後より恥骨痛を呈し立ち上がり動作困難となった1症例
大丸利沙



演者一同で記念写真



学会の様子

『作業療法の存在が排泄に対する不安を軽減した事例』

西東 佳奈(OT)

【はじめに】

今回、排泄に焦点を当てて介入した結果、不安なく排泄できるまで改善した事例を経験した。なぜ今回の結果に結びついたのかを振り返ることにした。

【事例紹介】

頸髄損傷により不全麻痺を呈した60歳代女性である。両下肢・体幹の痺れ、右半身の脱力感があった。当時の日常生活活動は入浴のみ介助、移動は車椅子自己駆動、排泄は夜間のみ自己導尿であり、FIM(排尿管理)4点であった。仕事にて外出することはあるが、2時間程度であった。

【作業療法評価】

作業選択意思決定支援ソフトを用いて今後の希望を聴取した結果、排泄・整容・仕事が挙げられた。排泄について、職場のトイレに不安を感じており、仕事に集中できない状態であった。職場が和式トイレであることへの不安、腹圧をかけないと排泄が難しいことやそれに伴う残尿感が失敗することへの不安となっていた。そのため、排泄を済ませてから外出し、外出時間より早く帰院している状態であった。排泄に対する不安の要因として、排泄コントロールが難しいことが考えられるため、遂行機能に着目して介入することとした。

【経過】

事例と排泄日誌を通して排泄傾向を知ること、骨盤底筋群運動や職場の環境を想定した動作練習を行った。また、介入にあたって協業・共感的に関わることを意識し、一緒に練習を行う、適宜排泄の悩みを事例と作業療法士が共有した。徐々に、腹圧をかけずに残尿感なく排泄できる経験が増えたことで、自発的な発言が聞かれるようになり、自ら作業療法に参加するようになった。また、職場での排泄に対する不安が軽減していった。その頃から、化粧をするようになり、起床時間も入院前の生活に戻すなど、病院のスケジュールから脱した生活を意識するようになった。

【結果】

導尿は不要となり、FIMも6点へと改善した。「職場でもできるようになりました」など職場での排泄に対する不安も軽減した。それに加えて、外出時間も2時間程度長くなっていた。

【考察】

できる経験が増えたことで自己効力感が向上し、事例を能動的な行動に導いたと考える。また、作業療法士の協業・共感的関わりが、排泄の不安と一緒に解決してくれるパートナー的存在となり、良好な関係性を築くことができ、自ら作業療法に参加する行動変容へと繋がったと考える。介入によって生じた事例の行動変容がなぜであったのか、動機は何であったのかを振り返ることは臨床を行う中で大切であると感じた。

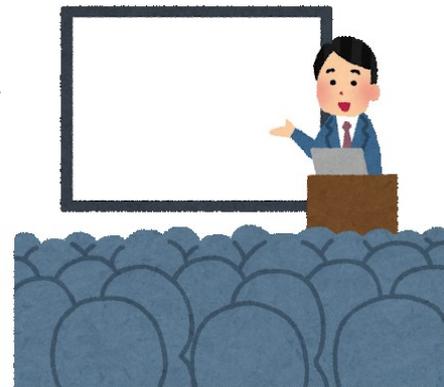
学術発表会を終えて

科内学術委員会 委員長 松本周三(OT)

去る2020年8月19日に6回目となる科内学術発表会を開催しました。演題発表されたスタッフ、当日参加頂いた方々など開催にあたりご協力頂いたすべての皆さまに御礼申し上げます。

さて、この科内学術発表会ですが、始まったのは2015年になります。目的は「日々の臨床業務、および臨床場面から生じる問題点や疑問点に気づき、明確にすることで、これらに対する知識理解を深め、治療技術の向上を図ること」でした。1人の患者さんにより良い各療法を提供できるように、そしてすべての患者さんへ拡げていくという想いが込められています。技術の向上には様々な手段がありますが、自分自身の臨床や取り組みを振り返り(言語化し)他者へ伝えることは有効な手段とされています。リハ科内でその機会を作ることは、スタッフ全員のスキルアップを図るという狙いがあり、先輩の頭の中を覗くこと、他スタッフの取り組みを知ることから、特に若手のスタッフは様々な知見を得てもらいたいと思っています。

この取り組みは毎年試行錯誤を重ねてきました。どうすればより有意義な会になるのか、学術委員のメンバーで検討を重ね、毎回新たなことを試していました。その甲斐もあり、ある程度形成化することになり、安定した催しになったと感じています。今後は質の充実を図っていきたいと思います。しかし、一方で気軽に演題発表できる場(発表会)ということも確保したいというジレンマを抱えています。質が上がることは嬉しい反面、発表者にとってはハードルが高くなってしまいます。しかし、それを避けているとリハ科全体のスキルアップにはならないため、そこを上手く調整し、発表してもらいやすい場を作っていけるよう学術委員会のみんなと取り組んでいきたいと思っています。現在はリハ科スタッフのキャリアデザインにも組み込まれ、2年目には必ず発表機会が作られます。ここだけに留まらず様々な規模の学会で自信を持って発表をしていける人材が増えることを期待しています。開催や運営は安定軌道に入ったため、今後はさらなる挑戦を目指したいと思っています。まだまだ思案中であり、具体的なことを記載することができませんが、学びの多いおもしろい発表会になるよう挑んでいきたいと思っています。



『第一子出産直後より恥骨痛を呈し立ち上がり動作困難となった一症例』 大丸 利沙(PT)

Key word: 恥骨痛, 立ち上がり動作, 地域連携

【症例紹介】

今回、出産後2週で当院産後ケア外来を受診した変形性仙腸関節症の初産婦を担当した。受診のきっかけとなったのは、地域の助産師による産院と当院の連携である。症例は20代後半で、経陰分娩時に医学的介入として子宮底圧迫法と会陰切開法を実施され、出産後から強い恥骨痛が生じた。産院にて骨盤ベルトの装着をおこなったが疼痛に変化なく、産後14日目に受診となった。主訴は「恥骨が痛くて思うように動けない」、疼痛部位は恥骨部と左鼠蹊部で運動時痛はVisual Analog Scale (以下、VAS)で100/100(mm)であった。立ち上がり動作(体を前に倒すと恥骨にこたえる)で最も強い恥骨痛が生じ、授乳以外の育児動作は実母が行っていた。レントゲン画像では恥骨結合離開が疑われた。産後うつなど精神的な問題はみられなかった。

【評価とリーズニング】

来院時、すべての動作は痛みのために緩慢であった。立位姿勢は反り腰姿勢である一方、座位姿勢では仙骨座りであった。評価において腹直筋離開が3横指、自動下肢拳上テストでは左右とも5(拳上不可)と体幹機能低下がみられた。主訴である立ち上がり動作では体幹前傾すると恥骨に疼痛が生じるため、骨盤後傾位で体幹中間位のまま上肢のプッシュアップで立ち上がりを行っていた。座位体位前屈は前屈角度20°で恥骨痛が生じ、仙腸関節可動性の左右差がみられた。両股関節屈曲・左股関節屈曲位での外旋での関節可動域制限、大殿筋や脊柱起立筋など後面筋の過緊張がみられ、同年代の女性の立ち上がり時の体幹前傾角度の平均37.6±6.5°(丸田,2004)に至らないことで、立ち上がり動作が困難になっていると推論した。

【介入内容と結果】

腹式呼吸を用いた体幹深層筋の賦活、等尺性収縮後弛緩を用いたリラクゼーション、骨盤ベルトを巻く位置の指導、動作指導を実施した。座位体位前屈角度が50°となり、仙腸関節可動性の左右差が改善した。介入後の立ち上がり時の恥骨痛はVAS 50/100となった。

【考察】

産後2週間の母体は子宮復古が不十分で授乳リズムも整っていないため、外出すること自体困難であったと思われるが、本症例は受診したことで痛みが改善し、安心して育児に臨めるという感想が得られた。今後も地域の産院や助産師との連携を強化し、ケアを必要とする人が受診できる体制を整えていきたい。

『母親としての役割を再獲得できたことで自己効力感が向上し、 趣味活動に取り組むようになった事例』 三浦 純(OT)

Key word: 役割、自己効力感、興味・関心チェックシート

【はじめに】

今回関節リウマチ(以下、RA)が増悪し趣味の継続や家事遂行が困難、身の回り動作に介助が必要となり自己効力感が低下した症例を担当した。本人の思いや目標を興味・関心チェックシートを用いて共有し、役割が再獲得できたことで、自己効力感が向上し、趣味活動に取り組むようになったため報告する。

【事例紹介および評価】

60代女性。50代でリウマチを発症。夫、息子、娘と4人暮らし。両上肢各関節に変形、可動域制限あり。粗大筋力は両肩P、その他F+~Gレベル。入院前ADLは食事、トイレ、整容は自立。以前は入院中自室で手芸をしていることが多かったが寝て過ごすことが増えていた。在宅では夫氏が身の回りの介助と家事の大半を担っていた。

【介入経過】

「家事がしたい」「本当は自分のことはしたい」と希望あり。介護負担軽減を目的にセルフケアに対して介入。更衣可能となるが負担が強く退院後継続は困難と判断。目標を整理するため興味・関心チェックシートを使用して面接を実施。料理がしたいと希望されたため協議の結果「退院後調子がいい時に夕食の下準備をする」を目標とした。ポテトサラダを調理し実行度1/10→8/10、短期満足度1/10→8/10になった。調理実習後は家事に対して意欲的な言動が見られた。退院後約1か月後に足関節固定術のため入院。前回退院後は小皿程度の調理を毎日行っていた。今回家族の健康や栄養面を気にされる発言が聞かれた。メインとなる料理を問題なく調理できた。趣味的活動に対しても前向きな姿勢がみられ準備、片付けも含めて練習し新たな趣味へも取り組むことができた。

【考察】

今回興味・関心チェックシートを用いて面接を行ったことで、ご本人が考える「母親」という役割に着目して支援ができた。適切な目標設定、成功イメージが出来たことで自己効力感が向上し、趣味活動へ取り組む意欲に繋がったと考える。役割に着目して介入したことで母親という役割を再獲得でき、さらには以前のように趣味に取り組む姿を見ることができ、作業療法士としてその人らしさを取り戻す支援ができたのではと感じた。

生活行為向上マネジメント指導者認定合格

今学会第8演題で聞き慣れない言葉が作業療法士の中村貴紀君から紹介されました。その名は生活行為向上マネジメント(Management tool for Daily Life Performance 以下MTDLP)

日本作業療法士協会が会員の生涯教育制度として、また少子高齢社会における「高齢者の持てる能力を引き出す地域支援のあり方研究事業」の一環で「作業している人は元気で健康である」という理念を具体的に国に提案する方策として開発されたツールです。そのMTDLP指導者は全国で会員の0.3%にあたる196人しか存在せず、なかでも鳥取県内では今回認定された当院の中村君を含めて2名しかいません。その理由の一つがかなり厳しく合格基準が設定されていることにあります。膨大な情報や評価を繰り返し、休日や就業時間後に症例をまとめ、それを他施設のセラピストにも査読をしてもらうなど努力に努力を重ね、ようやく手に入れた認定といえます。これもひとえに日々患者さんとしっかりと向き合い多職種と連携して作業療法を展開している賜物であり、自身の臨床を見つめ直し、より効果的な作業療法を提供していきたいという臨床における中村君の自己研鑽に対する意識の高さがうかがえます。

MTDLP活用のメリットとしては、高齢者に限らず幅広い対象者に応用できる点にあります。また鳥取県作業療法士会はMTDLPを臨床実習で活用するための『鳥取モデル』を開発し、臨床現場での活用にとどまらず学生指導のツールとしても今後作業療法士が学習すべき重要な内容に位置づけ取り組んでいます。中村君に続き多職種連携のツールとして、また生活行為向上を目指してMTDLP取得者が一人でも多く誕生することを期待しています。【文責・山根】



難関と言われているMTDLP指導者認定に合格した中村君

『長期にわたり寝たきり状態だったが、多職種連携の結果自宅への外出が実現した一症例』

井尾政美(OT)

Key word: 外出支援 QOL 他職種連携

【目的】

家族の強い希望をきっかけに、長期入院中だった寝たきり患者の自宅への外出が、多職種での密な情報共有と連携によって実現し、家族・本人にとって後悔のない時間を過ごせた。その過程を報告する。

【症例】

90代女性。中心静脈栄養管理。重度の拘縮を呈し寝たきり状態であり、離床機会は入浴のみだった。

【外出のきっかけ】

家族から担当看護師へ「おばあちゃんをずっと住んでいた家に一度帰らせてあげたい。このままおばあちゃんが死んでしまったらどうしようと不安になる。」と相談があり、X年6月に担当看護師から作業療法士へ相談があった。主治医より秋頃気候が良くなったら検討の余地ありと一応の許可が下り、方法の検討を始めた。

【経過】

①自宅までの移送方法②玄関から屋内へ入る方法③屋内での移動方法・姿勢保持方法・車いす選定④体力⑤中心静脈カテーテル管理方法⑥費用・タクシー予約、を検討し、同時にリハで離床を開始した。X年10月、計画と費用をまとめたレジュメと本人が車いすに乗った時の写真、実物の車椅子他物品を揃えた上で、担当看護師・セラピスト・家族でカンファレンスを開催した。

【結果】

11月初めに外出実施した。本人の他に家族が4名参加し、1時間弱自宅で過ごした。本人は自宅へ戻ったことや家族がそばにいることをよく認識していた。

【転帰】外出の2か月後肺炎により死去された。

【考察】

今回実現に至った要因に、本人の普段からの表出及び家族の強い希望、各担当者間での意思統一、特に医師の協力が挙げられる。方法や費用について提案、経過の共有がスムーズに行え、外出の具体的なイメージを形成でき、家族へ意思決定を促すことができた。

<編集後記> コロナ禍の中、長い梅雨が明けたと思えば連日の猛暑と、いったい世の中どうなっているのだと嘆きたくなる日々が続いています。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるように猛暑はまもなく終焉を迎えると思いますが、コロナについてはまだまだ先が見えずこれから秋の訪れと共にインフルエンザも流行すると思うと医療機関で働く私達は一層気を引き締め立ち向かっていかなければならないと思いを新たにしています。その一方でコロナの流行に伴い、県外はもとより県内で開催される研修会・学会も殆どが中止になってしまい自己研鑽の場を奪われています。オンライン研修や今回学術大会でもあったように日々患者さんと向き合ってきた成果を顧みること治療者としてのスキルアップを図っていききたいものです。【文責:山根】